

浅野軌道

明治 32 年 10 月、セメント王と言われた浅野総一郎は秋田県八幡平字切留平地内にて硫黄鉱区の特許を得、さらに明治 35 年 1 月、小字湯沼、中ノ沢、小屋ノ沢の鉱区増区の許可を得て「浅野熊沢硫黄山」の経営を行った。

採掘された硫黄は大場谷地に集積され、鉄索にて芦内沢まで運び、大葛大谷から約 18 km の山林軌道で扇田まで下した。

「浅野熊沢硫黄山」は、製錬器械の完成遅延等により巨額の損失が発生し、明治 36 年休山となる。

硫黄採掘の休止後、軌道は森林軌道として浅野製材所が継承し、一部扇田営林署との共用も含め天然秋田杉の運搬が主力となった。

当時檜内村に次いで県内第 2 位の産炭地であった大葛村の木炭もこの軌道を利用し、また、交通不便な当時であったので急患の輸送や急用の伝達等に利用され、軌道は地域の大事な交通・通信の役割も果たした。

昭和 3 年、浅野製材株式会社扇田分工場の撤退に伴い軌道は扇田営林署へ譲渡され、昭和 20 年代から 30 年代後半に掛けて順次廃止された。